

日米鉄道シンポジウム 2024 「持続可能な社会の実現に向けた価値の創造」
宿利会長 挨拶

皆さま、こんにちは。運輸総合研究所（JTTRI）/ワシントン国際問題研究所（JITTI USA）会長の宿利正史です。

お忙しい中、本日のシンポジウムに足をお運びいただきました皆さま、また、オンラインでご視聴いただいています皆さまに、心から感謝申し上げます。

先ず最初に、この度の岸田内閣総理大臣の訪米に当たり、昨日の日米首脳会談や本日の日米比首脳会談及び米連邦議会における総理演説といった公式行事へのご対応に多忙を極められている中、ビデオメッセージをご提供いただきました山田重夫駐米日本国特命全権大使に、厚く御礼申し上げます。

また、基調講演を賜ります、

- ・ ジェニファー・ミッチェル 米国運輸省連邦鉄道局副局長
- ・ 岡野まさ子 日本国国土交通省鉄道局審議官

のお二人に心から感謝申し上げます。

更に、パネルディスカッションにご登壇いただきます、モデレーターのお2人、そして日米の鉄道会社を代表される8人のパネリストの皆様、ご多忙な中、日米各地からここワシントンDCにお集まり頂きありがとうございます。

本日のシンポジウムは、公共交通機関としての日米の鉄道が果たすべき役割や意義について議論するため、米国公共交通協会（APTA）と運輸総合研究所の米国の拠点であるワシントン国際問題研究所の共催により開かれるものです。APTA とは、これまで数々のイベントを共同開催して参りましたが、新型コロナウイルス感染拡大のため、2020年3月の鉄道の安全対策をテーマとするシンポジウムは中止の已む無きに至り、2021年12月の鉄道のパンデミックからの復活をテーマとする円卓会議はオンライン開催を余儀なくされました。

本日は、パンデミック終息後、初めてAPTA と共同開催する対面イベントになります。APTA 会長のポール・スコウテラスさん、おかげさまでこの素晴らしいシンポジウムを開くことができました。ありがとうございます。

また、本日のシンポジウムは、昨年3月の「日米国際交流・観光シンポジウム」に引き続き、ワシントン桜祭りの公式行事として開催されるものです。ポトマック川の桜は、日米の永遠の友好関係を象徴するかのように、百年以上の時を超えて首都ワシントンの情景を彩り、市民の皆様の目を楽しませています。（只今こちらにご出席頂いている）全米桜祭り協会会長のダイアナ・メイヒューさんは、本日のシンポジウム開催に当たり一方ならぬご助力を下さいました。本当にありがとうございます。

さて、本日のシンポジウムでは、鉄道が生み出す社会的・経済的な価値について、そして日米における持続可能な鉄道システムの構築と、両国の連携について取り上げたいと思います。

ここで少し歴史の話をさせていただきますが、日本に初めて鉄道をもたらしたのは米国でした。1854年の日本の開国に際し、黒船を率いていたマシュー・カルブレイス・ペリー提督が、徳川将軍家への贈り物として持参した品々の中に汽車が含まれていました。汽車と言っても長さ2.4メートル、本物の4分の1スケールの模型ですが、実際に石炭を焚いて時速20マイルで走ることができました。円形に敷かれた100メートル程度の線路を走る汽車は、当時の日本人の好奇心を大変に刺激し、誰もが汽車に乗りたがったと、ペリー提督の手記に記録されております。

ペリー提督がもたらした汽車は、海外における鉄道事情、特に鉄道の産業インフラとしての側面に日本人の目を向けました。その結果明治政府は、早くも1872年には新橋・横浜間約29キロメートルを結ぶ初の本格的な鉄道の開業にこぎ着けます。その後弛みない官民の投資により、東京を起点とする鉄道ネットワークの全国への拡大を果たすと共に、日本全国で、鉄道駅を中心とした都市化が促進されました。こうした動きを背景に、我が国の鉄道関連技術は目覚ましい進歩を遂げ、1964年には世界で初めての高速度鉄道である新幹線が開業され、時速500kmで走行する超電導マグレブ新幹線が開発されるに至っております。

国内で高められた日本の鉄道関連技術は、米国に里帰りすることになりました

た。1983年にニューヨークメトロに納入された川崎車両製 R62系車両をはじめ、米国各地の交通機関において日本製の車両が活躍しており、一部は米国内に生産拠点を設け、米国内の雇用創出にも貢献しております。

当地、首都ワシントンにおいても、日立レールがワシントンメトロに車両256両を納入する契約を結んでおりますが、その生産拠点が、お隣メリーランド州ワシントン郡にて今年夏より稼働を始める予定と聞いております。そこで製造される「フリート・オブ・フューチャー」と名付けられた車両ですが、先週まで、そのモックアップがナショナル・モールにて展示されていたそうです。皆様もご覧になりましたでしょうか。お客様目線で様々な趣向を盛り込んだ新型車両、近い将来にサービス開始予定とのことですが、首都にお住いの皆様方のお役に立てる日が待ち遠しく感じられます。

さて、このような歴史的な関係を背景として、日米両国はこれまで鉄道の恩恵を受け続けてきました。そして今や現代社会の特有の新たな課題、カーボンニュートラル社会の実現や、渋滞緩和・災害時のサービス維持といった都市機能の維持確保、成熟社会における経済成長等に対応するため、鉄道の意義が改めて注目されております。また、米国の都市鉄道に加え、テキサス高速鉄道への日本企業の参画など、両国間の鉄道分野における関係がより密接かつ重要になっていることは言うまでもありません。

本日のシンポジウムでは、日米の政府関係者、鉄道事業に関わる実務家の皆様をお招きして、鉄道に与えられたこのような新たな意義づけと、鉄道の生み出す社会的・経済的な価値、そして持続可能な鉄道について議論を行っていただき、皆さまとご一緒にこの問題を考えていきたいと思っております。

最後に、本日のシンポジウムが、日米両国の関係者にとりまして、それぞれの抱える社会的な課題の鉄道を通じた解決に貢献すること、そして日米関係の更なる発展につながりますことを祈念しまして、私の挨拶といたします。

本日は真にありがとうございます。

(以上)